

竹中芳子の老人大学卒業論文 - 山田俊卿のこと -

竹中芳子は竹中靖一の妻であり、当舎副理事長である私・中尾敦子の母ですが、明治期の明誠舎を法人化した山田俊卿のひ孫です。俊卿から指さして四書五経を教示され、その時に積み重ねた学びが、夫竹中靖一が「心学」関係の古文書を読むときの手助けに役立ったと聞かされています。

昭和の名著100選に選ばれ、ミネルバ書房のご厚意で再版された竹中靖一『石門心学の経済思想』はまさに夫婦の協力で生み出されたと、不肖の娘が記すことを父竹中靖一も異論を唱えないでしょう。実際、当時はワープロもなく、もちろんパソコンもない時代、清貧の学者の博士論文を和文タイプ業者に委託せず完成させたのは、芳子でした。また、昭和30年代に復活した明誠舎例会を事務局として、学者の竹中に代り、家内労働と学生の協力を得ながら応援した事が、昭和の心学活動の原点でした。(中尾敦子：京都大学大学院教育学紀要参考)

昨今大阪市の福祉史の視点から、山田俊卿を取り上げる研究者は見受けられます。確かに、医学者としての仕事の傍らで、多岐にわたる活動はまさに石田梅岩の時代に彼や継承者が目指した市民活動(ある意味での啓蒙活動)ではと、いささかの私情を挟んで医学者の社会貢献としての心学を考えてみる事もあります。

私は現在生涯教育の分野での研究者の一隅に立つ者として、父竹中靖一の研究行程や実績の整理に取り組んでいます。母の記したいいくつかの文は、そ

こには出すに及ばない資料と考えています。

そこで、心学明誠舎の歴史を繋いだ一人ではあるが、決して表面に出ない竹中靖一のパートナー芳子の拙い文を、HPという場に開示します。

現在、心学活動は多岐にわたり、歴史・経済の分野だけでなく、町おこし、人づくり、心理学的な分野などからも考察され、論考される時代を迎えているように思われます。多分野の方々にお読みいただけることで歴史の中で、心学が社会とどんなかわりをしてきたかを知る資料の一つになればと掲載します。芳子没後7回忌の社会貢献として、あえて原文でお読みいただくと幸いです。

心学明誠舎 副理事長 中尾 敦子

<リード>

母・竹中芳子は平成二年(1990年)吹田市の山田にあった(注：万博公園西北部、大阪大学吹田学舎の近く)大阪府老人大学北部講座に申し込み、当りました。七十七才でした。期間は一年間でしたが喜んで通いました。終了後も同窓会が組織されており、長い間歩こう会等にも元気に参加していました。以下の文章は、その卒業論文として記されたものです。



老人大学卒業論文

福祉科 竹中芳子

私が老人に入り福祉科を選んだのは外でもない。私の曾祖父が福祉らしい事に骨を折って居たのを身近く見ていたからである。彼は、現在吹田市にある大阪市立弘済院の前身の一つ、慈恵病院の創設にたずさわった一人である。医者で大正十年、九十一才で没した(1831~1921)。私は母が結核で、生後一年で死別したので、七十才を超える曾祖父母の下で幼児期を過した。家には、婿養子の祖父と父、叔父二人、そして、私の兄二人、皆医者であり、又医者になれと云う方針の家庭であったので、家業は彼等に任せて曾祖父は動き出したのであろう。

貧しくて医者の恵を受けられぬ人々の為に、大阪の医者仲間と共に、施療病院を仮設する事から始めた。博済病院(西区阿弥陀池)、慈恵病院(東区唐物町、1889)と変遷はあったが、のちに大阪市が弘済会を作り、それに合同する為、慈恵会を解散する迄、関わっていたのである(1913)。

私は最近、昭和五十年代になり、曾祖父のこういう事などの記された伝記の小冊子をたよりに、吹田弘済院を訪ねたが、一般見学者に説明する案内書には何も書かれていなかった。再度訪れた。大阪市史編集室より出された「大阪市史紀要」を持って行った。院内に石碑が一個あり、漢文調ながらわしい碑文が記されていた。そこに曾祖父の名を見出す事が出来た。

その時、思い出したが、確か昭和四十何年頃に、

その大阪市史紀要二十三号の執筆者、川端直正氏が拙宅に取材に来られた事があった。彼は、亡夫の知己で、大阪市史編集室に席を置かれていた。その後間もなく故人となられたが、その紀要二十三号には、明治時代における大阪慈恵病院の沿革が記されている。

曾祖父の仕事は、まだあった。大正初期には乞食が道路によく居た。特に、春秋の彼岸には、四天王寺、一心寺などで、物乞いをしている数が多かった。私の家は、元、東区今橋にあったが、天王寺西門前に引越した。それは乞食の中に癩病患者が多く居るので、その為に皮膚病院を設置する為と聞く。之も彼のやむにやまれぬ仕事であつたらしい。

「船場で安穩に町医者をしていればよいのに、わざわざしかも大阪の町はずれの天王寺などへ移って・・・」と、のちに、私は婚家先の、竹中の舅に、結婚後云われた事がある。もっともこの癩病のことは、その頃から国や市町村の方針で伝染病の隔離の実行が捗り、個人の医家の出る幕でなくなったので、私の家は唯の病院となった、併し、私は覚えている。天王寺境内の幾つかの門の屋根の下で、耳や鼻の形の異様な乞食が居たのを・・・。中には女の中年の人は、腕に赤坊を抱いて居た。衛生思想のまだ普及されて居なかった時代と云おうか、日本の七、八〇年前の姿である。現代でも低開発国の光景をテレビで見るが、全く似ていると思う。同じ人間として、之でよいのかと思う事が多い。その時、私は五、六才から就学時であった。

此の外に、彼は同郷の後輩が精神薄弱児の施設を

作る時に、後援をして何度も官庁に出向いて手伝った事を私は見ている。又、私等には夢の様な話とかしか思われぬが、大きな貯蓄団を日本銀行内に作り、当時の日本の国債を減らす事に真剣にかけ回った。前者は今も大阪府南河内に桃花塾として運営されて居り、後者は第二次世界大戦中に、彼の娘、私の祖母の名義で国へ献納され消滅した。

更に、曾祖父には福祉には関係ないとも云えるが「石門心学」という、社会教育方面への運動があった。本人はよき後継者があり、皆が自分のあとからついて来ると信じていたが、理想どおりにはいかなかった。祖父、父は先に亡くなり、医業を心ならずも勉強させられていた叔父二人も早死にし、もう一世代あとの私の兄二人は、家の強制的な医科への進学に謀判して、医を選ばなかったという不肖の子孫達であった。そして祖母に依頼されて沢山の蔵書の始末にたずさわった私の亡夫が、その蔵書を研究に使用する事となり、結局私共夫婦が一番曾祖父の辿った行跡に、近づいた事になったのである。亡夫の専攻である江戸時代の経済思想史の研究は、曾祖父の福祉にはあまり関係はないが、社会教育という事で明治初年迄の学校教育のない時に、日本各地に広がっていた石門心学とよくつながっている点で蔵書は大いに役立たせてもらった。

残念にも亡夫は勤務先が定年制度の実施されないままに、七十八才まで現職にあり(近畿大学)、非常勤一年加えて、七十九才の時、脳梗塞で倒れ、二年後に死亡した(1986)。過労で体力を使い切っていたようである。現在は七十才定年となったから、

この年令を当てはめると定年後もう少し、ゆっくり自分の仕事の締めくくりも出来たであろう事と遺憾である。今の私のように、たとえば老人大学に入れて頂くようなゆとりで、亡夫を置きたかった。残された私は今だに書籍の整理も出来ずにいる。私も亡夫の倒れた翌年、癌の告知を受けた。幸い初期癌の為、手術も受け、今年五年目を迎えるが先ず無事らしい。

私は福祉の事を少しでも知りたいと思う。又、私の祖先の真似は出来ないながら、その気持ちを少しでも倣いたいと思い、此の勉強する場を選んだ。不幸な人々を幸せにするのが福祉と聞く。今の世代では価値観が異なるので、不幸と幸福の分かれ目をどこにつけるか決めにくい。たとえば私共は戦争の苦い体験から、何が幸せかという事をつかんだ事だけでも貴重な幸福と思うのだが、それにしても実に大きな犠牲を払っての体験である。

福祉も行き過ぎにならぬよう、老人自身が自立出来る事は必ず自立して、甘やかされぬよう生きねばならぬと思う。私は広島で原爆に逢い、地獄をこの目で見た。生死の境を往来する人を見て、身を引きしめられる思いはしても、何も人様にはしてあげられなかった。こんな時、あの曾祖父が居たら何をしたらろうかと思ひ起こす事もなく、今、思い出して情けなく反省する。終戦時、三十三才の若さを持った筈の自分を後悔している。